

---

# 魔法少女リリカルなのは ドクロを持つ転生者

暁 楓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ドクロを持つ転生者

### 【Nコード】

N8976Y

### 【作者名】

暁 楓

### 【あらすじ】

テンプレな理由で神に殺された主人公が、テンプレな転生を受けて、テンプレにもリリカルなのはの世界で頑張ります。

でもテンプレじゃない気がする幼少期を過ごし、地味に原作を崩壊させて、物語は結局テンプレな気がする中学校から。

才能をいっぱい持って、願いを叶える力も持って、だがしかし、自分の世界は常に無音。

そんな主人公の、テンプレではない力を使ってテンプレな物語を生きていく物語。

一応チートオリ主。しかし他と比べたら大したことなくね？そんなキャラです。作者は転生ものは初書きです。未熟な駄作者ですが、よろしくお願いします。

## e 1 . プロローグ 1 (前書き)

どうも、色々他の小説が危うくなりつつある暁 楓です。

もう、色々とやばい駄作者ですが、この作品も生暖かい目で見守ってくれたらなと思います。

あらすじ通り、中途半端と言える程度にチートな転生オリ主です。そんな、“完璧ではない力”でどう頑張っていくのかを書いていたらなと思ってます。

ちなみに、忙しい方は後書きを見てください。話をガッツリ纏めたわかりやすい説明を載せます。

ではどうぞ。

## e 1 . プロローグ 1

俺の名は、忌束キリヲ。

転生者だ。

転生。それも二次創作では珍しくない、神様によって記憶を継いだまま漫画・アニメの世界へ行くというもの。  
俺はそれによって、“この世界”で、“才能”と“王の証明”を持たされ、生を受けた。

・・・まずは、今にいたるまでの、昔話をしよう・・・。

「すいやせんでしたぁー！ー！ー！ツツ！ー！ー！」

“今”から、もう何年も前。

何もない真っ白な空間で、1人の中年男が俺に土下座をしてきたのが始まりだった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・誰？」

突然ここに来て、いきなり土下座された“俺”は、そう返す他なかった。

「は、はいっ！私はここ、天界で“神”をやらせていただいておりますっ！ー！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

説明が長いので割愛

「・・・・・・・・えっと、つまり俺は、多忙だった貴方のうっかりミスで寿命の書類をシュレッダーにかけてしまった・・・・と」

「もー！ー！し訳ありませんッ！ー！ー！」

地面を砕かん勢いで頭を振り下ろして土下座を繰り返す神。

ちなみに、シュレッダーにかけてしまった書類は複数人分らしい。  
まあ、俺1人だけということは普通に考えてありえないけど。  
・・・シュレッダーが天界にもあるんだと思ったのは自分だけではないはず。

あと、現世での死因は心臓麻痺。デスノートか。

「・・・・・・・・・・で、俺はどうなんの・・・・・・・・？」

「は、はい！こうなったのは私の責任ですので、私が責任持って別の世界へ転生ということにさせていたただきましたっ！！」

・・・どうでもいいけど、どれだけ低姿勢なんだよ・・・。

転生、ね・・・・・・・・。

「場所、というか世界は？」

「はい！あ、あの、貴方が原作を知っている世界がよろしいでしょうか！？」

「・・・・・・・・まあ」

「それでしたら、リリカルなのは世界でよろしいでしょうか・・・？」

「・・・・・・・・いいんじゃない？そこで」

というか、それ以外の作品でまとも知っている作品がほとんどないのが現状だ……。

あ、そう言えば。

「他の人達はどうするんだ？ 転生するとしたら、特に場所が被った場合とか」

「それについては……同じ世界に転生、ということに……. すいません。さすがに個人別に、IFの世界を作ることとは無理です……」

まあ、無理もないだろうな。

「お詫びと言っては何ですが、物語に適応できる力や道具と、ご希望する能力、そして願いを3つまで叶えようかと！」

「あ、それ別にいいです」

「な、なぜですか!？」

「いや、原作に関わろうとして痛い目に遭うのは嫌なので。それに、リリカルなのはなら他の転生者も来るでしょ？ ならその人に任せちゃえばいいかなと」

「い、いや……そうだったら、私の……立場が……」

聞く話によると、何にも施しをせずに転生したら上司の神達に厳罰を食らうらしい。



なこと言われてもなあ……。

「……なら、その3つの願いについては、何か願いを叶える道具にして現世に送って。あと力は……うん、神のあんたがラウンドムに選んで、それを付けちゃって」

「そ、そんな！？それでは施しがないと……」

「転生した後で願いを思いついたらそれを叶えるって形に変えるだけだし、力も最初から知ってたらつまらないから。そう言っておけば反論もないんじゃない？」

「は、はあ……」

とりあえずは納得してくれただろうか。

「で、では、そういうことで転生させます……生活に問題ない環境と、リリカルなのは世界での必要レベルの魔力、そしてデバイスはデフォルトということにさせていただきます。あ、あと、願いを叶える道具は、手に入れた時に使い方もわかるようにしておきますので。あ、最後に、転生後の自分の名前を新たに設定してください」

「あ……はい」

どこからか紙……新しい俺の書類が手渡された。名前の欄に新しい名前を記入しろってか。

ん……じゃ、これでいいや。俺が原作を知っている数少ない作品のキャラだ。

書き終わり、書類を神に返す。

「で、では……転生、いきますー！」

「ん？……えっ、あ、ちよっ、テンプレEEEEEEEEッッ！  
！！」

落ちた。

これが、転生までの出来事だ。

## e 1 . プロローグ 1 (後書き)

今回を纏めると!!!

神

「転生してー」

オリ主

「オツケ」

神

「じゃあ落ちてー」

オリ主

「これじゃあテンプレだよ」

転生しました。

こんなんです。わかりやすいでしょ？

もう数話分はプロローグとして使います。ご了承ください。

## e 2 . プロローグ 2 (前書き)

プロローグ2です。

まだプロローグは続きますよ？

今回は才能発芽編といった感じですかね。

また忙しい方は後書きで簡単な内容を。

ではどうぞ。

## e 2 . プロローグ 2

そして、転生させられた。

転生させられてから数年間は、ある意味地獄とも言えた。赤ん坊からの転生だから、もはや黒歴史。もう思い出したくない。

転生した俺の名前は忌束キリヲ。

少年ジャンプで連載していた漫画『エニグマ』のキャラだ。運がいいのか、俺の髪の色はキリヲと同じ黒だった。

神によって何かの能力を付けられたが、知らなければ使うこともないだろう。そして下手に使わなければ騒ぎにならないだし、原作に関わるかどうかぐらいにいる俺にとっては、何もしないで現状維持が最善だ。

当時そう思っていた俺に、黒歴史なんていうのではない、現実の地獄が来るのは、俺が7歳になってから。

そしてその日が、俺の“力”が発現する日であり、その他、特別な日でもあった。

俺の親は、忌束ノゾミというおふくろだけだった。おふくろは艶や

かで長い黒髪を生やし、スタイルもいい、文句なしの美人だ。人もよく、理想的な女性と言える。

だが、そんなおふくろとは正反対に、親父は最悪だった。いや、あんなのはもはや親父とは認めない。

俺の血筋上の親父は、暴力団の男、それも幹部だった。

詳しくはわからないが、そいつにおふくろが強姦されてその結果、俺がデキてしまったらしい。つまり、俺は望むべくして産まれたのではないのだ。

俺が産まれてからも、そいつは何度も家に押し入り、おふくろに襲いかかった。だが、乱暴をされた訳ではない。脅迫されたが、金目的ではない。金を取り上げてくることもあったが、それでもあいつの目当てのものは別にあつた。

おふくろも、金は出しても奴の本当に要求するものだけは頑なに渡そうとしなかった。叩かれても、殴られても、ナイフで脅されても、おふくろは“それ”を差し出そうとしなかった。

俺は当時“それ”が何なのか知らなかったが、それを知ったのは、俺が6歳であつたある日のことだった。

当時は休日で、おふくろは買い物に出かけていて俺は留守番をしていた。

夕方になり、不意に玄関の扉がガチャガチャと激しく音を立てた。何度も争いを見た俺にはすぐにわかった。またあいつが来たのだ。隠れようとしたのだが、扉が無理やり開けられ、ズカズカとそいつとその部下2人が入り込んできた。

「チツ、女はいないか……おい、ガキッ」

俺のことは気にせず、一通り探しまわったそいつは、俺にいきなりナイフを突きつけてきた。

「お前はあいつと住んでんだからわかるだろ？『木箱』はどこだ。言えっ」

「……知らない」

俺は首を横に振って答えた。

本当に知らない。木箱ってなんだ？こいつが探し求め、おふくろが必死に守り続けている木箱には何がある？

「……知らないだあ？そんな嘘、通ると思ってるのか？……さつさと言えっ！木箱はどこにある！！」

「知らない」

「てめえっ……ぶっ殺されたいか！！」

「知らない！！」

負けじと声を張り上げ、睨みつけた時だった。

そいつがブチ切れた。

「このクソガキッ……おい、押さえろっ！」





と広がっていく。

一通り背中を抉った奴は次に俺の体中を切り裂き、さらには手や足さらには胴体にもナイフを突き刺した。

その間部屋中に響く、俺のこの世のものとは思えない断末魔。

ゲス野郎はそんな俺を見て笑っていた。

「キリヲっ!!」

その時だった。おふくろが帰ってきたのは。

おふくろは俺の断末魔を聞き、血まみれの俺を見て、すぐさま奴の部下達をどかし、俺を助けようと動いた。しかし、そんなおふくろの前にゲスが立ちふさがった。

「待ってたぜっ。さあ、アレをよこしな!」

「どきなさい!あなたに構っている暇なんかないわ!!」

おふくろがどかさうとするが、男と女。ゲス野郎はビクともしない。

「さっさとアレをよこせと言ってんだよっ!黙って俺の言うことに従えっ!!」

「黙りなさい!あなたなんか・・・キリヲにこんなことをするあなたなんか、ここから出て行ってっ!!」

ドクンッ

「このクソ女アマっ！！」

ゲスがおふくろに殴ろうとした、次の瞬間だった。

グイツ

「うおっ！？」

見えたのは、目の前にいるおふくろではなく、その真逆である、後ろへと腕を動かすゲスの姿。

「な、なんだ！？腕が勝手に……！」

そんなことを言いながら、後ろに動く腕を空いている手で抑えるゲス。

そして、見た。

「……な、なんだこのカウンター！？」

ギユルギユルギユルギユル……

勝手に動くゲスの腕に張り付いた、奇妙な黒いカウンター。

日・時・分・秒が記されたカウンターが回転し、その上には巻き戻しを示す左向きの三角形が2つ。

何が起きたのか、わからなかった。

そして同時に、

全てを理解した。

「キリヲっ！」

ゲスが同様している間におふくろがゲスの部下を押しつけ、俺を引っ張り出した。

「この野郎っ！！」

しかし部下の野郎もただでは返そうとせず、持ち込んでいた金属バットで横薙ぎに殴りかかった。

その時に、俺はありったけの力で叫んだ。

「戻れっ!!！」

そうしたら、そいつの金属バットを振るう動きが“戻った”。

さらに俺は、近くにあったコップをそいつの顔面に投げつけた。

「ギャツ・・・!!！」

怯み、後ろによろめくゲスの部下。

それでも、腕の動きは“戻り”続ける。

結構な速さで振った分、同じ速度で“戻る”バット。そいつの後ろにいるゲス。

結果。

ドゴッ!

「ぐぶうっ!!！」

バットがゲスの腹に直撃した。

「兄貴！！」

「な、なんだよコイツ！気味が悪いっ！」

「くそっ、覚えてやがれっ！」

この現象に恐怖したのか、ゲス共は早々に出て行った。

が、それが運命の別れ道、いや、そいつらの運命だったようだ。

キイイイイイイツツ、ゴシヤアアアツ！！

ゲス共は、道路まで飛び出したところでトラックに跳ねられ即死。

俺は、奴らが即死する音が聞こえた直後に、意識を閉じた。

俺の怪我は相当酷く、退院するまで数ヶ月要した。その上、多くが古傷として残り、動きにも制限が付くほどだった。

俺の自由は、あのゲス野郎からの理不尽によって奪われた。

そして退院して家に帰って、おふくろが俺に見せたいものがあると

言ってきた。

それは、例の木箱だった。

何の変哲もない、粗末な木箱。大きさにして、人の頭ぐらいなら入りそうだ。

そしておふくろは木箱を開け、その中身を取り出した。

中身は、ドクロだった。

下顎の骨が前後で入れ替わり、額辺りから上の部分がない不気味なドクロ。

「……………それは？」

俺は尋ねた。

しかし、俺はこれの正体を知っていた。

俺の名前の由来でもある、二次元の作品で最も重要となる物体。所有者の願いを叶える代わりに、周囲の運命を歪める呪いのドクロ……

。

「呪いのドクロで、持ち主をエニグマって言う王様にする物なの」

エニグマの証明　。

だが、持った者をエニグマにさせるこのドクロを、おふくろが普通に触れている。つまりこれは……

「母さんが……王様？」

「ええ……今はね」

そう言つて、おふくろは今まで手の清潔さが売りの仕事だからと言つて常に右手にはめていた黒い革手袋を外した。

「このアザを持った人がエニグマになって、ドクロに願いを3つまで叶えてもらうことができるの……」

おふくろの右手には、アザが刻まれていた。

人差し指と中指には丸、親指には四角で格子状に刻まれた黒いアザ。手の平と甲に刻まれれば完全なエニグマとなつた証である。

「危険な物だから、最後の願いで誰の手にも届かないところに置いていくつもりだったけど、この間使っちゃってね」

この間とは、俺の才能が初めて発現した時のことだ。

キリヲにこんなことをするあなたなんか、ここから出て行っ

てっ!!

おふくろのその叫びを、ドクロは願いと読み取ってしまったらしい。結果、今のおふくろは王ではあるが意味のない状態らしい。

「あなたの・・・キリヲのその力も、このドクロに願ったから・・・本当に、ごめんなさいっ・・・」

俺のこの力・・・これは作中の崇藤タケマルが使う『古傷による逆再生』の才能だ。ちょうど、タケマルも俺と変わらない境遇だった。理不尽・・・タケマルはその理不尽が嫌いだった・・・理不尽を受けた。

そして、これからの未来で、理不尽を受ける人がいるのを、俺は知っている・・・!

「母さん・・・僕は、理不尽は嫌いだよ。痛くて、つらくて怖くて悲しくて・・・もう、そんな理不尽は嫌だ」

言いながら、俺は目の前に映るドクロに手を伸ばす。

「もう理不尽は嫌だ・・・理不尽はもう、僕・・・いや、俺で終わりにしたいっ・・・!」

「キリヲ・・・!?!」

額の縁を掴み、握り潰すような気持ちで強く力を入れる。

おふくろは驚いているが、理不尽に対する憎悪が、それを認知させ



なかった。

「だから俺はっ……コイツで！理不尽をぶっ壊すっ……！」

バチッ

電撃を受けたような感覚がした。

おふくろの右手のアザが薄くなる。

同時に、ドクロを掴む俺の右手に、アザが刻まれていく。

「俺が……エニグマだっ……！」

こうして俺は、呪いのドクロの王となった。

## e 2 . プロローグ 2 (後書き)

今回を纏めると!!!

転生しました。

親父の虐待で逆再生の才能取得。

さらにエニグマになりました。

ね、わかりやすいでしょ？

今回はついに無印編です。サクッと片付けます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8976y/>

---

魔法少女リリカルなのは ドクロを持つ転生者

2011年11月28日07時55分発行